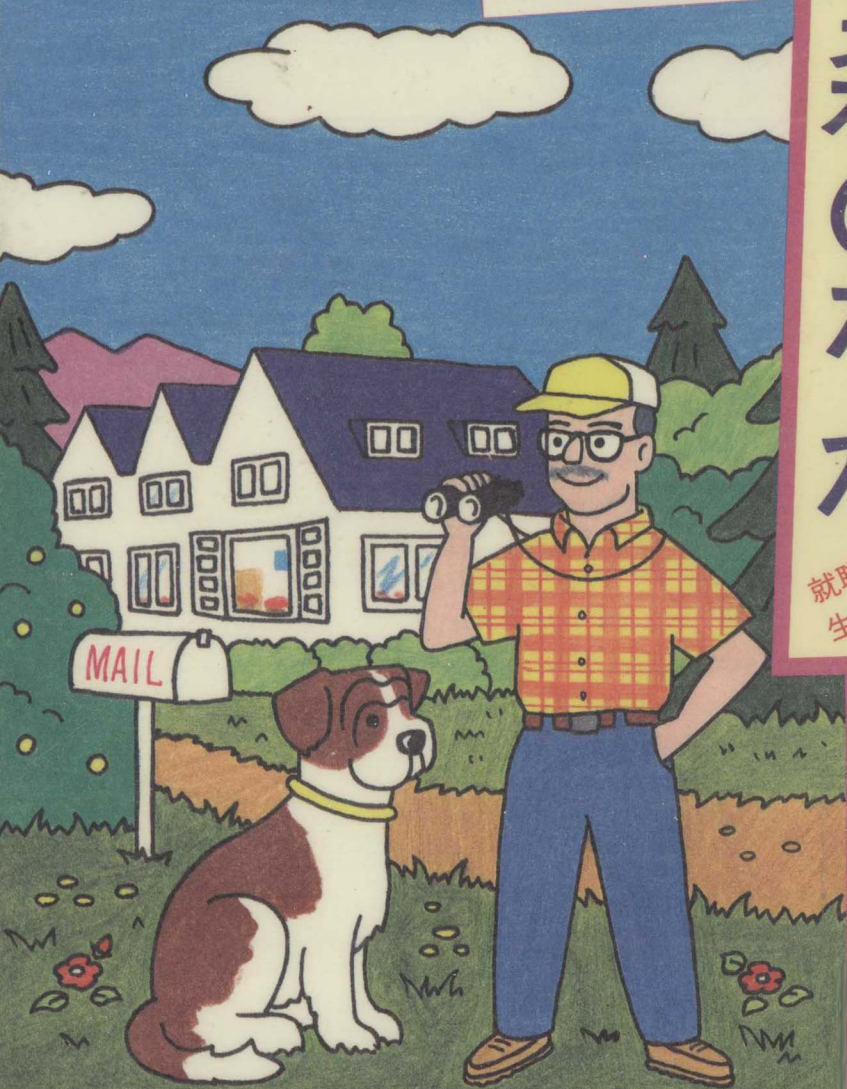
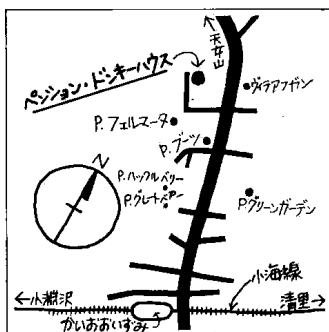


# ぼくのペンションは森のなか

加藤則芳

就職しないで  
生きるには<sup>6</sup>





著者について  
 加藤則芳（かとう・のりよし）  
 一九四九年、埼玉県生まれ。早稲田大学政経  
 学部卒業。一九七三年から八〇年まで、角川  
 書店に勤務。ペンション「ドンキーハウス」  
 オーナー。  
 住所：山梨県北巨摩郡大泉村西井出八二四〇  
 一四七三  
 電話：〇五五一（三八）二九七〇

〈就職しないで生きるには〉<sup>6</sup>

ぼくのペンションは森のなか

一九八三年七月一五月初版

一九八六年七月一〇日七刷

著者 加藤則芳

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六・六二七九九

中央精版印刷・美行製本

© 1983 Noriyoshi Kato

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

就職しないで生きるには⑥

# ぼくのペンションは 森のなか

加藤則芳



晶文社

ブックデザイン

平野甲賀





ぼくの  
ペン  
ション  
は森の  
なか

目次

1 しぼりたてミルクで朝食を

9

2 リスとセントバーナード

31

3 子どもと山で暮らしたい

42

4 夢の八ヶ岳

58

5 山の神がその気になった

72

6 資金獲得作戦

84

7 モンゴルの素晴らしき人々

100

8 忘れられないクリスマスイブ

118

9 馬車馬みたいに働いて、ドンキーとなる

130

10 自然といっしょに生きるには

146

11 シーズンオフの楽しみ

159

あとがき



# 1 しぼりたてミルクで朝食を

朝六時四〇分起床。きのうまでじとじと降っていたいやらしい長雨は、きょうはあがった。久々に青空がのぞいている。

台風や雨が予報されると、いつもうんざりする。とりわけ、この夏は週末のたんびに台風がやってきた。だから週末になるとキャンセルがでた。キャンセルがでも、飛びこみがあったりして、そのぶん埋まったりすることも多いのだけれども、手続きが面倒くさいし、気分的にキャンセルはいやなものだ。

そして、何よりも天気が悪いと、お客さんが気の毒だ。

「きょうの天気はどのくらいもつかない」

などと考えながら、のそのそと起きだす。隣りの布団で、女房と息子の亮りょうがまだ寝ている。

本来、ぼくたちのオーナールームは、二階にちゃんとあるのだけれども、厨房の隣りの子供部屋がとても便利なものだから、夏の間は夫婦で居候している。オーナールームは、物置き兼アルバイト部屋と化している。山での暮らしを優雅にしたい、とちょっとだけ洒落たオーナールームを作ったのだけれども、夏の間は便利さには勝てない。四畳半に親子三人である。

顔を洗い、コーヒーを沸かし、ダイニングルームにランチョン・マットとフォーク、ナイフ等を並べる。

そのころ、義母とアルバイトの佐野君が起きてくる。義母は女房の母親で、今一緒に暮らしている。山好きである。

佐野君は、この夏五代目のアルバイトだ。夏のハイシーズンは、およそ二カ月続く。アルバイトといっても、ほとんどタダ働きに近い安月給で、二カ月もの間働かせるのは気の毒だということもあって、この夏は、五人を交代制にした。みんな、元ドンキーハウスの

お客だった連中で、気心が知れている上、よく働いてくれるので、大助かりしている。

この佐野君は、まだ二一歳の学生で、高校時代はアメラグの選手だった。身長は一八〇センチ以上、スラッとした好男子のため、女の子にたいへんもてる。バイクの気違いで、カワサキのナナハンに乗っている。飯よりナナハンの方が好きだ。バイクの話を手順にさせると一晩中聞かされる。興味のない人は辟易する。

彼は、このバイクのことで、ドンキーハウスに来て、ひとつ頭にきていることがある。

清里、大泉あたりは、夏ともなると高校生の女の子たちがワンサカ来る。ドンキーハウスは、ある程度年齢層は高い方なのだけれども、それでもやはり多い。彼女たち、たいてい真赤なカワサキを見て叫ぶ。

「ワァー、カッコイイ！」

「そうだろ、そうだろ」

と、佐野。

「でも、私、ホンダの方がいいワ！」

「どうして？」

「だって、マッチが乗ってんだモン！」

「ウルセイヤイ！」

彼に言わせると、こういった会話が一回や二回じゃないそうである。

「あいつら、どうしてこう画一的なんだ」

思っていたよりずっとひどい、とたいして年齢差がない彼があきれている。ましてや、バイクキチというよりはカワサキキチにとつては、「クソツタレー」なのだそうだ。

余談が続くが、彼の礼儀正しさと明るさは、二二歳であるということが信じられないほどだ。ぼくは、ほとんど病氣的なほど、明るくて礼儀正しい人間が好きなため、たいへん気に入っている点だ。

彼の父親は築地の魚河岸で大きな魚問屋を営んでいて、彼は普段、毎朝三時半に起床して河岸へ行く。将来、跡を継ぐつもりで毎日修業している。河岸では毎日、「ヘイ、ラッシュアイ」だの、「バックキャロー、どけどけ！ シャマだジャマだ」だのと派手にやっている。これをペンションでやられると、お客が来なくなる。とてもうまく使いわけているところは感心する。

彼は、河岸から大学へ行く。大学から帰宅すると、今度はバイク屋にアルバイトに行く。修理したり、組み立てたり、時には営業もする。

なかなかよく働くのだけれども、いつ勉強しているのかわからない。

余談ついでにもうひとつ。ドンキーハウスがとりもつ縁で、彼は、ぼくの親友のカメラ

マン佐藤秀明さんと戸井十月さんのアメリカ大陸横断バイクツーリングの取材に、アシスタントとして参加することになった。二カ月に及ぶ旅だ。

彼はもう、ドンキーハウスに足に向けて寝られない。

さて、厨房は二人に任せて、ぼくは愛車ランドクルーザーを駆って野菜と牛乳を仕入れに行く。今朝は、久し振りの晴れ間とあって空気がすがすがしい。雨あがりの八ヶ岳をはじめ、南アルプスや奥秩父連峰の山々の中腹にうすく雲がたなびき、遠く甲府盆地には靄がかかり、さながら水墨画のような世界だ。

まず日野水牧場へ行って、まさに今、搾り終えたばかりのミルクを六キロ、ミルク罐に入れてもらう。罐を通して、牛の体温が意外なほどあたたかく伝わってくる。

牧場を出て、畑に行く。今朝はレタスのサラダを予定している。腰に下げたハンドメイドのシースナイフを取り出し、必要な数だけ採る。

今年栽培した野菜は、レタス、サニーレタス、サラダ菜、キャベツ、赤キャベツ、ジャガイモ、キュウリ、トマトなどで、全部無農薬だ。

本来ならば、ぼく自身が栽培して耕したいところなのだけれども、忙しくて管理がなかなか思うようにいかないため、近所の人に頼んでドンキーハウス用に作ってもらっている。

この搾りたてミルクと採りたて無農薬野菜が、ドンキーハウスの朝食の最大サービスだ。乳脂肪分3.3パーセントのパックミルクとスーパーマーケットの野菜しか知らない人にとって、この上もないほどの新鮮な高原の味を楽しめる。

再びランクルを駆って、もどってくる。ミルクは、そのままだとお腹をこわす恐れがあるので、火を通して殺菌する。

サラダを作り、コーヒーをポットに移し、女房を起こしにかかる。

「ヒメ、時間でございます」

わが家の大蔵大臣、兼食糧庁長官は、おもむろに起きだし、仕上げの卵料理にかかる。このたかが卵料理が素人のぼくにはなかなかうまくできない。人数の多少にかかわらず、常に同じ状態に焼きあげる技をぼくは持たない。オープンして二年たっても、頭を下げてヒメにつくっていただくことにしている。

それにしても、総理大臣、外務大臣、通産大臣、及び環境庁長官などを一身に兼ねた、わが家のオーナーであるこのぼくが、たかが「メシ」と「カネ」の大臣にかしづかなければならないとは。

不本意ながら、ここに実質的な力関係があらわれている、と見るむぎが多い。

わが息子、亮はまだ寝ている。彼は、ほうっておくと、九時半でも十時でもまだ寝てい

る。五歳である。保育園は八時半から九時半の間に行かなければならない。たいてい遅刻する。

亮はハヶ岳に来る前から夜に強かった。けだし朝に弱かった。ぼくの東京での仕事から、夜中や明け方に帰宅することがとても多かったため、亮はそんな時間に目を覚ますことがよくあった。そのまま遊んだりした。二歳までは、そんな生活だった。

「どこかに定時制の保育園ないかしら」

冗談半分に女房がよく言っていた。

きょうもまた遅刻するだろう。そしてまた、そのこといつものように夫婦でやりあう。

「お前がいつもグズグズして起きないからだ！」

「でも、だって」

このでもとだってが気に入らない。亮まで最近マネしはじめた。

舞台裏での、つまり厨房内でのこんな会話、お客さんは知るよしもない。佐野君はいつもニヤニヤして聞いている。

ダイニングルームに、すべてがセットされた。きょうの卵料理はスクランブルド・エッグだ。パサパサにならないように作るのがコツだ。